

特別座談会

Are you dense?

Dense breastと乳がん検診

米国“Are you dense?®”の活動とその成果に学ぶ



近年、乳腺濃度の高いdense breastが乳がん検診におけるマンモグラフィの検出感度に影響する要因として注目されている。日本ではまだ認知が進んでいないdense breastの問題に対し、米国ではNPO法人Are you dense?®の活動が社会を動かし、乳がん検診のあり方が大きく変わろうとしている。そこで、Are you dense?®の創設者であるNancy M. Cappello氏の来日を機に、日本のNPO法人乳がん画像診断ネットワークのメンバーとのディスカッションを企画した。dense breastをキーワードに、米国と日本における乳がん検診のあり方を検討し、乳がん死を減らす取り組みについて語り合っていた。

出席者

Nancy M. Cappello 氏
(NPO法人 Are you dense?® 創設者・常任理事)

戸崎 光宏 氏 / 町田 洋一 氏
吉田 民子 氏 / 嶋内亜希子 氏

(NPO法人 乳がん画像診断ネットワーク)

小原史紗子 氏
(テルモ株式会社 人事部 人事企画チーム)

司会

増田 美加 氏
(NPO法人 乳がん画像診断ネットワーク / 女性医療ジャーナリスト)

米国と日本における乳がん検診のあり方を考える

(司会) 増田：今日は、米国においてdense breastのリスクや乳がん検診に関する教育・啓発活動を行っているNPO法人Are you dense?®の創設者であるNancy M. Cappello氏(以下、Nancyさん)をお招きし、「日本におけるdense breastへの理解と乳がん検診の充実に向けて」をテーマに座談会を行うことになりました。今回の企画の意図について、戸崎先生にうかがいます。

戸崎：第23回日本乳癌学会学術総会〔2015年7月2日(木)～4日(土)、会長：中村清吾・昭和大学医学部乳腺外科教授〕がNancyさんを招聘し、7月4日のシンポジウム「Dense Breastの評価と対策」で、dense breastに対する乳がん検診の実情などをご発表いただくことになりました。また、私たちNPO法人乳

がん画像診断ネットワーク(以下、BCIN)も7月3日にNancyさんを招いてアカデミックセミナーを開催します。この機会にインナービジョン誌上でも座談会を行うことで、日本におけるdense breastに対する乳がん検診のあり方について議論し、啓発につなげたいと考えました。また、今回の座談会には、企業検診にMRI検査を取り入れているテルモの小原さんにも参加していただき、取り組みの実際について紹介してもらいたと思います。

ターニングポイントを迎えた日本の乳がん検診

(司会) 増田：近年の乳がん検診では、dense breastがキーワードとして注目されるようになってきました。dense breastとは何か、そして、その影響について戸崎先生にご説明いただきます。

戸崎：dense breastとは、脂肪の割合が低く乳腺組織が多い



戸崎 光宏 氏

NPO法人 乳がん画像診断ネットワーク理事長 / 亀田京橋クリニック診療部部長
1993年、東京慈恵会医科大学卒業。ドイツ・イェナ大学留学、亀田総合病院乳腺科部長(診断担当)などを経て、現職。



司会 増田 美加 氏

NPO法人 乳がん画像診断ネットワーク副理事長 / 女性医療ジャーナリスト
医療ジャーナリストとして、医療消費者に向けた医療、健康情報の発信を行う。自身も2006年に乳がん(DCIS)を発症。

ために乳腺濃度が高い乳房のことを指します。マンモグラフィでは全体に白く描出されるため、腫瘍が検出しにくくなります。日本人を含めたアジア人は、dense breastの女性が多くいます。dense breastは、現在の乳がん検診に2つの課題を与えています。dense breastによりマンモグラフィ検診の検出感度が低くなってしまふことと、アジア人でのdense breastと乳がんリスクの関係が明らかになっていないことです。欧米では、dense breastと乳がんリスクのエビデンスが蓄積されているのですが、アジア人のエビデンスはまだ確立されていないのが現状です。エビデンスについては、町田先生はじめ日本人研究者が現在研究を進めているところす。

そこで、この座談会では、1つ目の課題であるマンモグラフィ検診におけるdense breastの検出感度の低下について、Nancyさんも交えて議論したいと思ひます。近年、マンモグラフィ検診は、その利益だけでなく不利益も指摘されるようになってきました。7月2日に出されたばかりの日本乳癌学会『乳癌診療ガイドライン2015年版』では、50歳以上に対するマンモグラフィ検診の推奨グレードがAからBへ引き下げられました。また、第23回日本乳癌学会学術総会のセッションでは、非浸潤性乳管癌(DCIS)は必ずしも治療しなくてもよい症例があり、過剰診断にならないよう、絞り込みが必要であるという意見交換がなされました。

わが国ではこれまで、マンモグラフィ検診におけるdense breastの検出感度の問題についてあまり議論されてきませんでした。が、このような状況を見ると、まさに乳がん検診がターニングポイントを迎えていると言えます。今回の座談会が、わが国の乳がん検診のあり方を考えるきっかけになればと思ひます。

Dense breastの乳がん患者が 全米にムーブメントを巻き起こす

(司会) 増田：では、米国の乳がん検診を大きく変えたAre you dense?[®]の創設者であるNancyさんに、その活動のきっかけや経緯をお話いただけます。

Nancy：今日はお招きいただき、ありがとうございます。私が乳がんの診断を受けたことがきっかけとなってAre you dense?[®]の活動を始め、それが世界に変化をもたらすことになることは夢にも思いませんでした。

私は40歳になってから、毎年欠かさずマンモグラフィ検診を受診してきました。2003年も例年通り11回目となるマンモグラフィ検診を受診し、6週間後には一連の検診の流れとして主治医を訪ねました。その際、主治医が視触診で私の乳房にしこりを見つけました。主治医は、「マンモグラフィ検診を受けていたことは知っていますが、しこりがあるので念のため再度、マンモグラフィと超音波検査をしましょう」と言いました。

3日後に再検査を受けたのですが、マンモグラフィでは異常がなかったものの、超音波検査で25セントコイン大(直径約25mm)の腫瘍と13個のリンパ節転移が見つかりました。私は非常にショックを受けました。6週間前にマンモグラフィ検診を受けたばかりであり、しかも毎年受診し、規則正しい生活を行ってきたというのに！



Nancy M. Cappello 氏

NPO法人 Are you dense?[®] 創設者・常任理事

コネチカット州の特殊学校校長など、障害者教育に取り組んだ後、コネチカット州立大学で博士号を取得、特任教授となる。その後、教育コンサルタントとして活動する。2008年に自身の乳がんをきっかけにAre you dense?[®]を創設。現在、常任理事。また、2011年にはAre You Dense Advocacyを設立し、常任理事を務める。

医師たちは平然と、「あなたはdense breastだったため、マンモグラフィでは限界があり、腫瘍を検出できませんでした」と言いました。私はそれを聞いてにわかには信じられず、文献を読みあさりました。私自身、博士号を持つ研究者であり、原因を追究したいと考えたのです。その中で、当時の米国人女性の40%はdense breastであり、dense breastに対してマンモグラフィは検出感度が低く、また、超音波検査やMRI検査と併用する検診方法もあるということを知りました。

私は調べた事実を医師らに示し、私のようにdense breastの女性がいたら、早期にがんが見つかるように情報を与えてほしいとお願いしました。しかし、彼らの答えは「No」でした。標準的な方法ではないという、たったそれだけの理由です！

では、どうすればよいのか、私は悩みました。私自身が治療中のがん患者であり、片側の乳房を切除し、化学療法を行い、CTやPETなどの検査も受けています。私だけではなく多くの女性にとって共通の問題であり、また、家族の問題でもあります。私は、多くの女性とその家族たちを助けたいと思ひました。

その時、私の夫であるJoeが、「Nancy、君は何かアクションを起こさなくてはいけない。もちろん僕もだ。君を診断した医師たちはきっと反対するだろうけど、僕らが立ち上がるべきだ」と言ってくれたのです。そしてJoeは、私たちが住むコネチカット州の上院議員である女性政治家に連絡をとり、支援を依頼しました。そして、ついに2005年に、dense breastの人に対して乳がん検診に超音波検査を追加する費用負担を保険で認める法律を成立させることができました。さらに2009年には、dense breastの女性への説明義務とマンモグラフィ検診以外に受ける